慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大草原の小さなカッパ : Hiromi Gotoの「現代の民話」
Sub Title	A little kappa on the prairie : the contemporary folk legends of Hiromi Goto
Author	加藤, 有佳織(Kato, Yukari)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.58 (2011. 3) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	A Japanese Canadian woman writer, Hiromi Goto took her departure "from the historical 'fact' into the realms of the contemporary folk legend" in her debut novel, Chorus of Mushrooms. Her journey into the realms of the contemporary folk legends enables Goto to write works across generic borders while not leaving "historical 'fact'" forgotten. As Goto explains, in an interview with Debbie Notkin, that Japanese mythologies and legends "layer the reading of story," her kappa trilogy demonstrates the endless possibilities of retelling kappa legends. This paper tries to reexamine The Kappa Child among Goto's kappa trilogy within the context of kappa or water-sprite narrative, and give emphasis to a layer of the novel steeped in the history of immigration and settlement in North America. The kappa cannot essentially be interpreted as a figure rooted in Japanese culture: it travels. According to comparative studies of kappa legend, people across Eurasia share legends in which a water-sprite pulls a horse or cattle into water and thus the kappa legend cannot be defined as being original to Japanese creature. In more popular imagination, it is said that the kappa has emigrated from China via the Yangtze and the Yellow River to southern Japan. Given that it settled in the Canadian prairie after traveling across Eurasia and emigrating to Japan, Goto's kappa would call attention to one layer of the novel that delineates the history of immigration and settlement. In this layer of the novel, Goto links the history of a Japanese postwar immigrant family together with the history of pioneering and Native Americans since the beginning of the Nations as well as the history of the wartime internment of Japanese North Americans. Thus The Kappa Child is a work that intermediates between story-telling and history-telling.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20110331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大草原の小さなカッパ
――Hiromi Goto の「現代の民話」

加　藤　有佳織

「歴史の『事実』から現代の民話への出発となる」作品であると宣言したデビュー作 *Chorus of Mushrooms*（1994 年）から 7 年後，日系カナダ人女性作家 Hiromi Goto は *The Kappa Child* と *The Water of Possibility* を相次いで出版し，その 3 年後には短篇集 *Hopeful Monsters* をまとめる。「現代の民話」へ向かう Goto の作品は日本の神話や民話を採り込み，改変し，語り直す。*Chorus of Mushrooms* は，伊邪那岐命と伊邪那美命の国造神話のほか，一寸法師や姥捨山といった伝承を変形させている。そして，*The Kappa Child*，*The Water of Possibility*，*Hopeful Monster* の三作品はとりわけカッパ伝承に関心を向ける。およそ 20 年となる作家活動のうち，三つの作品を費やしてカッパ伝承に取り組んでいるのは，そのまま Goto が抱くカッパへの関心の大きさを表わすとともに，そもそも雑多で矛盾に充ちているカッパ伝承をカナダへ運び込み「現代の民話」へと語り直すのに，少なくともこれら三つの作品が必要であったことを示唆する。*Chorus of Mushrooms* における民話使用について Guy Beauregard は「『純粋な』口承文芸や『ほんものの』日本文化を復興・復活させようとしているのではない」と述べ，どのように語り直し作品に機能させているかが重要であると指摘しているが，*Chorus of Mushrooms* 以降の作品における民話使用についてもあてはまるだろう（49）。

The Kappa Child 出版後の Debbie Notkin によるインタビューのなかで

Goto は，カッパを “a fantastic creature” と形容し，現代の移民の物語へカッパ伝承を含めて日本の神話伝承を織り込む意図をこう説明する。“Bringing Japanese myths into contemporary human stories layers the reading of a story so that it moves beyond the limitations of contemporary realism into unpredictable terrain”（“Cross-Cultural Creature”）。物語を多層化しようとする Goto は，フロンティアナラティヴや SF にレズビアニズムを混ぜ合わせる *The Kappa Child*，ローティーン向けのファンタジーでありビルドゥングスロマンである *The Water of Possibility*，そしてホラーから妊娠小説まで多彩な短篇を集める *Hopeful Monsters* といった具合に様々なジャンルにわたるカッパ三部作において，カナダでカッパについて語りカッパに語らせることを多層的に実践してみせる。カッパの子を想像妊娠した日系移民の女性と彼女のなかのカッパの子とが交互に語る *The Kappa Child* には，相撲やきゅうりが好きであるとか，トイレで女性のお尻に触るとか，詫び証文代わりに骨接ぎの技を教えるといったカッパ伝承が盛り込まれている。そもそもカッパの子を妊娠するという枠組みそれ自体が，カッパ妊娠譚を想起させるものである。あるいは，Living Earth というパラレルワールドでの小さな姉弟の冒険物語 *The Water of Possibility* に登場するのは，呪いをかけられたゆえ言われたことをくり返すことしかできなくなったカッパの女の子 Fen of Willow Valley であり，呪いをかけた古狐 Old Patriarch が操るカッパの軍隊である。そして，11 の短篇を集める *Hopeful Monsters* にはカッパ伝承へ目配せする作品が句読点のように配される。第二作品 “Osmosis” が水を恐れ湖へ入ることをためらう女性を小さなカッパが見守る情景を描くと，第四作品 “Stinky Girl” はマナティやフェニックス，月や太陽，カッパの恋人たちのささやきといった神秘的な音を放つ女性を描く。最後の作品 “All Possible Moments” は，山口知子も指摘するとおり，夏のある日の図書館で汗をピタピタとたらして働く女性はカッパではないかと想像する可能性を残して短篇集をしめくくる。本小論では，こうした多彩な三部作のうちもっとも

カッパについて語りカッパが語る作品 *The Kappa Child* を読み，カッパ伝承を「現代の民話」へと語り直す意義を考察してみたい。

1．カッパの語り方，カッパの語るもの

カッパ伝承の採り込みは，もちろん，Goto 一流のマジックリアリズムとして解釈できる。Gordon Gamlin は，Maggie Ann Bowers が抽出しているマジックリアリズムの要素を *The Kappa Child* に見出し，カナダらしいマジックリアリズムの例として評価したうえで，カッパを語り手のアイデンティティ問題を解く象徴的存在と呼び，自然や豊かさに結びついているトリックスター性に言及する（136）[1)]。また，カッパのトリックスター性を前提としてこの作品を論じる批評家のなかでは，Wendy Pearson がジャンルの逸脱や混淆に注目する一方で，Marilyn Iwama は *The Kappa Child* がこれまでの日系作家たちが確立した「日系の叙情的物語や英雄的物語のどちらからも逸脱」しているものの，カッパ伝承の語り直しを「自由に楽しめるほどに『わたしたち日系人のようである』」読者の不足を懸念する（139）。Iwama の言う「日系人」らしさとカッパ伝承が本質的に結びつくかどうかは別として，どのようなカッパ伝承がどのように語り直されているかを解きほぐすには，Goto が作品末尾に添えているカッパのプロファイルだけではなく，具体的なカッパ伝承やカッパ研究を参照する必要があるという示唆はもっともである。カッパを「文化の産物」とみなし，ヨーロッパ中心的な美の概念とは異なるアジア的美の象徴だとする Larissa Lai の議論も同じく，Goto のカッパをカッパ伝承へ文脈化する必要性を示す点，とくに重要である（174）。超自然的な不思議を不思議とみなさずに日常的場面へ描きこむマジックリアリズムを得意とする Goto にとって，“a fantastic creature” であるカッパは，ジャンル混淆や日系文学らしさの問い直しを可能にすると同時に，作品を読み解くための長く広いカッパ伝承の文脈を引き込む素材なのである。

ここへ付け加えてみたいのが，なぜカッパだったのかという問いである。

コヨーテやカラスといった存在に対応する日本的トリックスターならば，タヌキやキツネもよかったはずである。なぜ Goto はカッパを選んでいるのか。その理由のひとつを，Goto 作品における水の象徴性を指摘している山口知子の論文「異形の人びと，他者性の魔力」が説明してくれる。山口の述べるとおり，Goto は *Chorus of Mushrooms* から一貫して，水は登場人物たちの変化や変貌の契機となり，生きていくうえで文字通りかつ比喩的に不可欠なものであることを描いている（252–53）。したがって，水と密接な関係にあるカッパは，Goto にとってほとんど必然的なトリックスターであった。

この水との親和性と並んで重要であるのが，カッパ伝承をひとつの歴史記述としても解釈しうるという点である。Takayuki Tatsumi はカッパ研究を大別し，トリックスターとして解釈する構造主義人類学の流れと，禁忌や社会の「裏側」を体現するものとして解釈する民俗学の流れの二つを示している（77）。構造主義人類学におけるカッパ研究としては，たとえば Cornelius Ouwehand が，カッパは神々の世界と人間の世界どちらにも通じて両者を仲介するトリックスターとして機能していると論じる（213）。一方，カッパ伝承から歴史の裏側を示す研究には，たとえば岡正雄や小松和彦，中村禎里によるものがある。岡は「異人その他」のなかで，さまざま椀貸伝説から古代経済史を掘り起こし，山姥や鬼や狐やカッパからお椀を借りるという伝承は原始交易の形態を表わしており，山姥やカッパは交易相手の異容を示唆していると解釈する（88–92）。中村や小松は，猿や川獺といった動物に加え，焼畑民である山の民，被差別部落者や河原者，山へ逃亡したイエズス会宣教師といった存在からカッパが形成されたことを論じている（中村 248–49，262–74，301–11；小松 250，260）。したがって小松によれば，カッパ伝承を含めた妖怪の伝説には「想像上のものだというだけではすまない大きな問題がひそんでいる」のである（260）。たとえば，柳田國男が『遠野物語』に採録したカッパ妊娠譚には，中絶や嬰児殺人の問題が見え隠れする，という具合に（41）。

カッパ研究をごく簡略に眺めたところで, Goto のカッパへ戻ってみたい。先ほど挙げた批評家のほとんどは，前者の解釈に基づいて *The Kappa Child* のカッパを論じ，そのジャンル混淆性に注目する。一方山口は，*Hopeful Monsters* を論じるなかで，山口昌男を援用しながら民俗学における異人と構造主義人類学におけるトリックスターを連動させる。短篇集が描く周縁化された者たちは，「自らを異形者たらしめている」社会構造における境界を，仲介者たるトリックスターのように自由に飛び越えると述べる（262–63）。この *Hopeful Monster* 論から，*The Kappa Child* におけるカッパを再検討するなら，そこには，トリックスター的なジャンル混淆と歴史を語る伝承性との共存が見えてくる。

Goto の言う「現代の民話への出発」とは，必ずしも「歴史の『事実』」の忘却ではない。民話がひそやかに歴史を語るように，Goto の作品は歴史を引き受け伝える。アジア系カナダ文学論のアンソロジー *Asian Canadian Writing beyond Autoethography* の序論において編者の Eleanor Ty と Christl Verduyn は，アジア系カナダ文学の 30 年を簡潔にまとめ，自叙伝的・自民族誌的な作品から「アジアらしさの『写実的』民族学的表象」を崩すような混淆的作品へ移行していると述べている（19）。そして，論者の一人 Pilar Cuder-Domínguez が *The Kappa Child* について奇しくも述べているのは，自叙伝的であるのを拒み，神話や SF などを混淆するハイブリッドな語りを構築することでアジア系カナダ人女性の主体を複数化・多様化しようとする Goto の作品もまた，「文化的・民族的遺産や，自民族文化を記述しようとする試みを拒絶しているわけではない」ということである（127–28）。混淆的な語りによる自民族文化の記述もまたあり得るのである。*The Kappa Child* はいかなる遺産を引き継ぎ，どのような歴史を語っているのだろうか。

2. 移り住む者の歴史

Goto による「現代の民話」は，ある場所から別の場所へと移り住む者

の歴史を引き受け，多層的に語る[2)]。*The Kappa Child* は，大阪からブリティッシュ・コロンビア，そしてアルバータへと移り住む家族を描く。彼らのたどったルートは，Goto 自身が千葉からアルバータへ移住した道すじにも重なるかもしれない。その道すじを少し延長してみるなら，Goto の祖父母が暮らしていた熊本を通り，熊本をはじめとする九州各地に伝わる 9000 匹のカッパ大移動の伝説へいたる。そのむかし仁徳天皇の時代に，つまり 313 年から 399 年のあいだに，中国内陸部に暮らしていたカッパたちは飢饉ゆえに揚子江や黄河を経由して熊本の筑後川へ移住したと伝えられる。和田寛は『河童伝承大辞典』に類似する伝承を採録している（605）。また，火野葦平はこの伝承を『河童曼陀羅』所収の「邪戀」の背景とし，「近東方面から河童の大軍が東方へ移住した。水をもとめての放浪であった。かれらは蒙古から中國を經て，日本にわたり，美しい川の豊富な九州に住みついた」と語る（261）。カッパ三部作におけるカッパを，多くの批評家がそうするように，日本らしいトリックスターとして解釈することも十分可能であるものの，中国内陸部ひいては近東からの移住を想像するこれらの伝承やカッパ文学を考慮するなら，カッパ自身の移動性・移民性もまた注目すべき点として浮かび上がるだろう[3)]。

移り住む者としてカッパをとらえてみると，*The Kappa Child* という作品が，別の場所へ移り住むことを多層的に描いていることがよりくっきりと見えてくる。第二次世界大戦下に禁止されていた日本からの移民は 1967 年に再開された。その 2 年後，Goto はアルバータへ移住している。*The Kappa Child* の語り手の家族もこうした戦後移民として，まずブリティッシュ・コロンビアへ移住し，つづいてアルバータの平原の農園へと移り住む。彼らの移動は，一方では 19 世紀の北米西部開拓民に引き比べられ，もう一方では，戦時下の日系人強制移住に重ねられる。

Little House on the Prairie を肌身離さず持っている子どもの語り手は，平原へ移動する車のなかでこう語る。“The Ingalls family were from the east so they went west. We’re from British Columbia, so we were in the

west, but we moved east to get to the same place, funny, huh?”（*KC* 42）*Little House* の西部開拓のルートを逆向きにたどって平原の農園へ到着したとき，語り手の父 Hideo は “This is a land for pioneers!” と笑い，語り手はお気に入りの本をさすりながらほほえみ返す（*KC* 133）。日系移民の西部開拓の試みが，*Little House* とは逆向きに始められたのである。

そもそも逆向きに始まった開拓生活が困難をきわめるにつれ，語り手は，開拓の正統性を問い始める。Ingalls 家が開拓する土地とはそもそも先住民の場所だったのではないか，自分たちもまた誰かから場所を盗んでいるのではないか，と問う。“Strange how their Pa [Charles Ingalls] just parked his wagon anywhere he felt like and called that place his. Maybe Dad [Hideo, narrator’s father] did the same thing. Maybe everyone did”（*KC* 45）。このように，戦後日系移民である語り手たちの移動に読み込まれているのは，19 世紀以来の北米開拓の歴史であり，そこには移民の問題と先住民強制移住以来の問題とのつながりが示されるのである。自分たちも含めて誰もがスクオッターなのではないかという語り手の不安は，Laura Ingalls の次の問いかけをくり返している。白人入植者のため政府はインディアンを西へ移住させるだろうと説明する父に Laura は，“But, Pa, I thought this was Indian Territory. Won’t it make the Indians mad to have to—” と聞きかける（Wilder 237）。移民の問題と先住民の問題がつながることによって，自分たちの土地や仕事を移民に奪われるのではないかというアジア系移民排斥運動の中核にあった不安と，時代のあと先はあっても移民は先住民の土地を奪っているのだという不安が表裏一体をなすことが明らかとなる。

そしてもう一方では，ブリティッシュ・コロンビアからアルバータへの移動は日系カナダ人の強制移住にぴったりと重なるものであり，アルバータの平原とは，かつてカナダ最大規模の労働キャンプのあった場所でもある[4)]。農園へ移動する途中でモーテルに立ち寄った際，モーテルの主人が強制収容への謝意を示すと，父 Hideo は憤慨する。批評家 Christine Kim

は，こうしたHideoの憤慨とは日系移民の歴史の拒絶であると解釈した上で，開拓が不首尾に終わる由縁をこの態度に見出す（Kim 291–92）。はたしてHideoが日系移民の歴史を拒絶しているかどうかは検討が必要であるものの，*The Kappa Child*に日系人強制収容の歴史の気配があるという指摘は力強い。

アルバータ平原における強制収容の記憶をGotoが少なからず意識していることを傍証するのが，*The Kappa Child*出版と同じ2001年に開催された企画展*Miyoshi*に寄せた短篇“With Dispersal as with (Be)Longing”である。このごく小さな作品は，第二次世界大戦下に日系移民が所有していたボートが押収されたことを註に添えながら，平原の家を立ち去る「あなた」について語る。「あなた」も両親も平原の家を選んだわけではなく，“Forced there all the same”と明かす語り手は，「あなた」へこう呼びかける。“You leave the prairie but the prairie never leaves you. . . . You are the first to leave the unchosen home. You will not be the last”（“(Be)Longing” 4）。強制移住を記憶する平原の家を立ち去る「あなた」から平原は立ち去らないという語り手は，「あなた」が引き受けるべき日系移民の歴史を指し示す。そのうえで，選ばれていない家を立ち去るのは「あなた」が最初でありそして最後ではないと述べているのは，「歴史の『事実』から現代の民話へ」向かうGotoを含め，日系移民の文学作品がどのように歴史と関係していくかということをも示唆するだろう。歴史を引き受けながら，そこからの出発を試みているのである。

ここで少しだけ，“With Dispersal as with (Be)Longing”における“home”という言葉に注目してみたい。「あなた」が立ち去ろうとしているのは，強制された場所であり“the unchosen home”であるが，それもまた“home”なのである。仕方なく移り住んだ土地にも家や居場所をつくり得ると同時に，望んで移り住んだ場所に居場所をつくり得ないのかもしれない。崩壊寸前の*The Kappa Child*の家族にとって“home”は何か，どこにあるかと考えるとき，前出のインタビュー“Cross-Cultural Creature”が

よい補助線となる。居心地のよい場所があったのならなぜそこを去ったのか，この土地での境遇が気にいらないのならなぜここにとどまるのかといった，唯一の日系移民としてすごしたアルバータで自身が直面した問いかけについて，Goto はこう述べている。

> Canada is our home, although the question is still posed that way. People of color may ask themselves why they stay but this is just the immediate reaction to oppressive force. The more important extension of this question is: what is causing them to question our desire to stay? And we all have the responsibility to examine our entitlement of living on First Nations' land. How are we complicit in the ongoing oppression of the people of the First Nations? ("Cross-Cultural Creature")

なぜここにいるのかと問いかけられたら，なぜそう問うのかと問い直し，そもそも先住民の暮らしていた場所であることを想起すべきだと言う。

こうして，中国奥地から移り住んだカッパをめぐるさまざまな伝承を携えて太平洋をわたった家族の軌跡は，強制収容の記憶を引き受けながら，アルバータの平原で西部開拓民や先住民の歴史へつながっていく。*The Kappa Child* は，ある日系戦後移民の家族を描きつつ，ひとつの場所から別の場所へ移り暮らすこと，自分にとって異質な場所あるいは自分が異質である場所に "home" を作ろうとすることの意味を問うている。

3. カッパの足あと

移り住んだ異質な土地での可能性を語るのもまたカッパである。前述したとおり，山口は Goto の作品において水はきわめて重要であることを論じている。このカッパと水との親和性は，移り住むことの長く多様な歴史のなかに置かれた移民の物語において，どのように解釈し得るだろうか。

大人の語り手はある日，*Little House* の Laura のようにエプロンドレス

を着ているが，弱りやせ細ったカッパの女の子を見つける。

> “What can I do?” I say fiercely. Because I know if she dies, something precious will be gone forever. “Tell me!”
> The creature unfolds a long, scrawny arm and gestures to the expanse of dry death which surrounds us.
> “Water.”
> I snap my head, look in every direction. How can I find water here? How many must die? So unfair. Why must we live to come to only this? And tears of frustration surge to my eyes, drip down my face. (*KC* 265)

脱水症状におちいったカッパの女の子が死んでしまったら，「何か大切なものが永遠に失われてしまう」と語り手は言う。日本の水辺になじみ深いものとしてのカッパ伝承に鑑みて，カッパの女の子が体現する「何か大切なもの」を日本文化的ルーツと解釈するのはたやすい。カッパにエプロンドレスは似合わない。しかし，カッパ自身の移動性を強調するなら，エプロンドレスを着たカッパの女の子とは，ある場所から別の場所へと移り住む行為そのものなのではないか。彼女の死によって失われてしまうのは，移り住むことの可能性なのではないか。水を求めるカッパの女の子のために何もできない語り手は，「どれだけ多くの者が死んでいかなければならなかったのだろう」と，目の前にいるカッパの女の子だけでなくこれまでの「多くの者」の死，つまりは歴史を思い，悔し涙をこぼす。移り住む行為の可能性を失わないように，移り住む者の歴史が絶えないように，カッパの女の子を抱きかかえる語り手の涙は，はたして彼女を死から救うだろうか。

日系移民の歴史を拒絶した Hideo は平原での米作りに失敗し続けるが，ただ一度だけ稲が豊かに実った年があった。その年は春から夏にかけて，

毎朝，“muscat grapes” のようにまるく甘い雨粒が降り，カッパが足あとを残していた（*KC* 226）。ぬかるむ水田に残る足あとは，上機嫌のカッパが跳びはねて踊ったことを物語る。

> Spread out before me, through the expanse of the green rice field, the moist mud tambo was literally covered by these small footprints. Like a gleeful creature had run jubilantly over every inch of the amazing wetness, jumping, leaping, dancing, stepping exquisite toes, perfectly webbed. (*KC* 228)

この水かきのある小さな足あとは何かと不思議がる子どもの語り手に，“Kore wa kappa da yo!” と Hideo は子どものように笑って言うが，語り手はカッパが何かすぐには分からない（*KC* 228）。Kim の解釈によると，Hideo は日系移民の歴史を拒絶していたゆえ稲作に失敗し続け，家族から疎外される。しかしながら，カッパと聞いてきょとんとする娘に，“Don’t you remember anything I’ve told you?!” と言って嘆く彼の姿からは，必ずしもそうではないように思えてくる（*KC* 229）。彼も何かを語り伝えてきたと自負している。彼がモーテルで拒絶していたのは，日系移民の歴史ではなく，戦時の強制収容を日系移民の歴史の提喩にしてしまうことだったのではないか。戦後移民である彼は，強制収容を経験した被害者である日系移民ではなく，むしろ 19 世紀の開拓民にならうことで，日系移民の歴史を語るもうひとつ別の方法を模索しようとしていたのではないか。平原での米作りもまた同じく，入植と開拓の歴史のなかに日系移民の歴史を位置づけようとする試みだったのではないか。

では，移り住む者がその歴史を語ろうと模索するなかで，1 年かぎりの雨とカッパの足あとは何を意味するだろうか。カッパが何かを思い出そうとする語り手は，母 Emiko にカッパの話をしてほしいとせがむ。母の語る物語は，その干乾びた身体に雨のように降る。“Okasan retold tales I

had forgotten. . . . . Her words rained softly onto my thirsty body”（*KC* 229）。そして，この年プレゼントされたダイバーズウォッチをいまだ身に着けている大人の語り手にも，ふたたびカッパの雨が降る。

> [A] raindrop falls. Full and round, as big as a muscat grape. I look up but there’s no cloud. Where has it come from? . . . We leap, bound, in the sweetness, our laughter. Soaring, we leap skyward, leave perfect footprints in the rich mud. New green shoots of life twine at our feet, rising leafy in the warm night air. And in the collage of green, the movements of our bodies, I can see kappa rising from the soil. Like creatures waking from enforced hibernation, they stretch their long, green limbs with gleeful abandon. Skin moist, wet slick and salamander-soft, kappa and humans dance together, our lives unfurling before us. (*KC* 274–75)

かつての上機嫌なカッパのように，大人の語り手はマスカットのような雨粒の落ちるなかで跳びはね，完璧な足あとをぬかるみに残す。目覚めたカッパが四肢を伸ばし，語り手たちとともに踊るとき，目の前には“our lives”が広がる。かたちを変えてときどき降りそそぐカッパの雨は，かつて語られた物語を想起させながら，移り住む者の一員として“our lives”を生きる可能性を語り手に示している。

こうして「現代の民話」である *The Kappa Child* は，移り住む者たちのながい歴史をほのめかしながら，現代の日系移民について多層的に語る。降り続けるカッパの雨は，そうして物語ることの必要と必然を，物語るために引き受けるべき歴史があることを示すのである。

注

1） マイノリティ女性作家らの作品におけるトリックスターについては，

Elizabeth Ammons や Jeanne Rosier Smith によって議論がなされている。Ammons らは，20 世紀転換期アメリカにおけるマイノリティ女性作家たちの多文化的作品に通底する語りの戦略を，聖俗，男女，生死などあらゆる対立項をコミカルに横断するトリックスターになぞらえ，「トリックスターの戦略（trickster strategies）」と名付けている（xi）。Smith は，マイノリティ女性作家の言語実験的側面およびジャンル混淆性を「トリックスターの美学」と定義する（14）。Goto の作品にも Ammons や Smith の議論は有効であり，カッパ三部作が多ジャンルにわたっているのは，カッパのトリックスター性ゆえとも説明し得るだろう。

2） Beauregard や Kim にならい，ディアスポラの文学と呼び表わすべきかもしれないが，ディアスポラに含意される民族的かつ宗教的離散の側面までをも Goto の作品に読み込むことはこの小論の目的ではないため，「移り住む」という表現を用いておきたい。

3） カッパは日本固有であると断定できるわけではない。たとえば，石田英一郎は『河童駒引考』において，カッパが馬を水中に引きずり込もうとする伝説が日本各地に存在し，それに類する物語がユーラシア大陸全体に見られることを論じている。民俗学への比較民族学的アプローチを採る理由を，以下のように，文化の連続性・国家横断性として説明する石田の比較カッパ論は，日本の民話を即座に日本らしさの象徴として解釈する傾向を見直す機会を与えてくれる。「われわれが祖先からうけついだ生活文化の基層を，わが国の常民生活の伝承のうちに深く堀り求めていこうとする日本民俗学が，問題としてとりあげてきた無数の対象の中，かなりの部分はたしかにわが国土の中で独立に発生し，われわれのもつ言語と文化との共同性にもとづいて，日本民族のあいだにひろく伝播した事がらとして，文化史的にもとにかく一応の解釈をつけうる性質のものである。だが他の多くの部分は，あるいはわれわれの祖先が悠遠のむかしに，大陸や南の島々からたずさえてきた文化の連続であったり，あるいは後の時代に，他の国々からわが民族の生活のうちに入り込んできた外来の要素であったりして，歴史の面からは，到底わが一国のみの問題として完全に理解できない場合も多い」（27）。

4） 飯野『日系カナダ人の歴史』119 頁。

Works Cited

“The 2001 James Tiptree, Jr. Award: Winner.” The James Tiptree, Jr. Memorial Award. <http://www.tiptree.org/2001/winner.html>. 14 Apr. 2006.

Ammons, Elizabeth, and Annette White-Parks, eds. *Tricksterism in Turn-of-the-Century American Literature: A Multicultural Perspective*. Hanover: UP of New England, 1994.

Beauregard, Guy. "Hiromi Goto's *Chorus of Mushrooms* and the Politics of Writing Diaspora." *West Coast Line* 18 (Winter 1995–96): 47–62.

Bowers, Maggie Ann. *Magic(al) Realism*. New York: Routledge, 2004.

Cuder-Domínguez, Pilar. "The Politics of Gender and Genre in Asian Canadian Women's Speculative Fiction: Hiromi Goto and Larissa Lai." Ty & Verduyn 115–31.

Gamlin, Gordon. "Japanese-Canadian Identity and the Function of Magical Realism in Hiromi Goto's *The Kappa Child*." *AALA Journal* 15 (2009): 132 –45.

Goto, Hiromi. *Chorus of Mushrooms*. Edmonton: NeWest, 1994.

——. Interview with Debbie Notkin. "Cross-Cultural Creature: Hiromi Goto Brings Magic into Everyday Life." Women Writing the Asian Diaspora. Spec. issue of *The Women's Review of Books* (July 2002). <http://Wellwsley.edu/WomensReview/archive/2002/07/special.html>. 20 July 2004.

——. *Hopeful Monsters: Stories*. Vancouver: Arsenal Pulp, 2004.

——. *The Kappa Child*. Calgary: Red Deer, 2001.

——. *The Water of Possibility*. Regina: Coteau, 2001.

——. "With Dispersal as with (Be)Longing." *Miyoshi: A Taste that Lingers Unfinished in the Mouth.* Ed. Baco Ohama. Lethbridge: Southern Alberta Art Gallery, 2001. 2–8; 22–25.

Ishida, Eiichiro. "The Kappa Legend: A Comparative Ethnological Study on the Japanese Water-Spirit Kappa and Its Habit of Trying to Lure Horses into Water." *Folklore Studies* 11 (1950): 1–152.

Iwama, Marilyn. "Fantasy's Trickster." *Canadian Literature* 180 (2004): 138–39.

Kim, Christine. "Diasporic Violences, Uneasy Friendships, and *The Kappa Child*." *Troubling Tricksters: Revisioning Critical Conversations*. Ed. Deanna Reader, and Linda M. Morra. Waterloo: Wilfrid Laurier UP, 2010. 289–305.

Lai, Larissa. *The "I" of the Storm: Practice, Subjectivity, and Time Zones in Asian Canadian Writing*. Diss. U of Calgary, 2006.

Ouwehand, Cornelius. *Namaze-E and Their Themes: An Interpretative Approach to Some Aspects of Japanese Folk Religion*. Leiden: Brill, 1964.

Pearson, Wendy. “Saturating the Present with the Past: Hiromi Goto’s *The Kappa Child*.” <http://www.strangehorizons.com/2003/20030106/kappa_child.shtml>. 8 Mar. 2006.

Radin, Paul. *The Trickster: A Study in American Indian Mythology*. 1955. New York: Schocken, 1972.

Smith, Jeanne Rosier. *Writing Tricksters: Mythic Gambols in American Ethnic Literature*. Berkeley: U of California P, 1997.

Tatsumi, Takayuki. *Full Metal Apache: Transactions between Cyberpunk Japan and Avant-Pop America*. Durham: Duke UP, 2006.

Ty, Eleanor, and Christl Verduyn, eds. *Asian Canadian Writing beyond Autoethnography*. Waterloo: Wilfrid Laurier UP, 2008.

Wilder, Laura Ingalls. *Little House on the Prairie*. 1935. New York: HerperCollins, 1963.

飯野正子.『日系カナダ人の歴史』東京：東京大学出版会，1997 年.

石田英一郎.『河童駒引考』1947 年．東京：岩波書店，1994 年.

岡正雄.「異人その他」『岡正雄論文集―異人その他』1979 年．大林太良編．東京 : 岩波書店，1994 年．77–121 頁.

小松和彦.『異人論―民俗社会の心性』1985 年．東京：筑摩書房，1995 年.

中村禎里.『河童の日本史』東京：日本エディターズスクール，1996 年.

火野葦平.『河童曼陀羅』1957 年．東京：国書刊行会，1999 年.

山口知子.「異形の人びと，他者性の魔力― Hiromi Goto，*Hopeful Monsters* をめぐって」『関西学院大学英米文学』第 49 巻 1 号（2004 年）：249–65 頁.

山口昌男.「今日のトリックスター論」『トリックスター』ポール・ラディン，カール・ケレーニイ，C・G・ユング編．皆河宗一，高橋英夫，河合隼男訳．東京：晶文社，1974 年.

柳田國男.『遠野物語』1910 年．東京：角川書店，1955 年.

Synopsis

A Little Kappa on the Prairie
The Contemporary Folk Legends of Hiromi Goto

Yukari Kato

A Japanese Canadian woman writer, Hiromi Goto took her departure "from the historical 'fact' into the realms of the contemporary folk legend" in her debut novel, *Chorus of Mushrooms*. Her journey into the realms of the contemporary folk legends enables Goto to write works across generic borders while not leaving "historical 'fact'" forgotten. As Goto explains, in an interview with Debbie Notkin, that Japanese mythologies and legends "layer the reading of story," her kappa trilogy demonstrates the endless possibilities of retelling kappa legends. This paper tries to reexamine *The Kappa Child* among Goto's kappa trilogy within the context of kappa or water-sprite narrative, and give emphasis to a layer of the novel steeped in the history of immigration and settlement in North America.

The kappa cannot essentially be interpreted as a figure rooted in Japanese culture: it travels. According to comparative studies of kappa legend, people across Eurasia share legends in which a water-sprite pulls a horse or cattle into water and thus the kappa legend cannot be defined as being original to Japanese creature. In more popular imagination, it is said that the kappa has emigrated from China via the Yangtze and the Yellow River

to southern Japan.

Given that it settled in the Canadian prairie after traveling across Eurasia and emigrating to Japan, Goto's kappa would call attention to one layer of the novel that delineates the history of immigration and settlement. In this layer of the novel, Goto links the history of a Japanese postwar immigrant family together with the history of pioneering and Native Americans since the beginning of the Nations as well as the history of the wartime internment of Japanese North Americans. Thus *The Kappa Child* is a work that intermediates between story-telling and history-telling.